

が交々如何に對處し如何に進退したかを明かにしてあつて、これら諸家の盛衰興亡の跡を知らんこする人々にこつては絶好の参考書と成るものである。（菊判八三一頁、圖版二十數葉、島根縣發行）

### ●東北文化研究 第一卷 第一號

本誌の創刊號が九月一日を以て愈々發行された。卷頭には喜田博士の發行の趣旨、次に同博士の「東北文化研究の必要と其の興味」「東北民族研究序論」；歴史家の觀たる我が民族觀、があつて、東北民族の研究は我が國史の根幹をなす日本民族の成立、日本國家發展の事情を明かにする上に最も重要な地位を占める事を述べてある。

其他同博士の「日高見國の研究」を始め、岩手縣最初の古墳發掘記録（小笠原謙吉）、末の松山傳説（齋藤忠）、菅江眞澄翁（深澤多市）、オシラ神に就ての小報告（佐々木喜善）、秀吉奥州征伐に關する伊達政宗の書簡に就て（中瀬武）、青森縣上北郡先住民族分布狀態（成田券治）、平泉毛越寺境内摩多羅神の行事（室谷精四郎）、秋田地方發見木製屐に就いて（武藤一郎）、朝日岳の話（伊東信雄）の諸

編、及び喜田博士の學窓日誌があり、其他彙報、餘白録等記事豊富にして挿圖も多く、東北文化を研究せんこする人々にこつては、絶好の参考雜誌となるであらう。吾人は本誌の發刊を喜ぶと共に衷心から其の前途を祝福する。（一二〇頁、東京史誌出版社發行、價五〇錢）〔以上松野〕

### ●ギリシヤ史研究 原隨園著

「事實を事實として真相を探求する事、事實を發展の相に於て觀察する事は、人間の本性に根ざす強い要求であつて、この二つの要求に刺戟されて歴史は發生するのである。」本書の前半をなす五章は著者のかゝる考の下に行はれたギリシヤ史學史に關する研究を集めたものである。而して著者はホメロス及びヘシオドスに素朴なる上記の歴史的精神をみこめ是を以てギリシヤ史學の曙光と見て居る。これはホメロスツクエデスよりヘロドトスに至り、更にポリュビオスの史風にも筆を及ぼし史學思想をたづね以て一貫したギリシヤ史學史を形づくつて居るのである。尙是等の歴史家が一箇の絶對的威力たる

「時」について如何なる態度にあつたかを述べた「時、運命」は就中興味深く讀まれる一章である。

本書後半の六章はギリシヤ諸家の理想國家、理想生活についての所論の研究、又それより導かれる、ギリシヤ人の實生活への考察であると言ひ得よう。ギリシヤに於ける理想國家論の研究はギリシヤ人の文明批評史でありギリシヤ民族の生活史である。ミする著者の理想國家論の考察はこの考により導かれて居り。是に關してヘシオドスの「仕事」<sup>エポカ</sup>アリストプロハアネスの「女の議會」、ヘカタイオス等の理想國物語等の概説も試みられて居る。「ルエクルゴスの傳説」に於ては素朴主義の理想國ミ目せられるスパルタに於けるこの傳説が一箇の軍國的復古的政治理想ミして成立せる事を論じ、「ソプヒストミその時代」では前五世紀頃のアテナイ人の思想生活を當時の思想界の代辯者たるソプヒストを中心ミして述べて居る。傳統を蔑視し都市國家の基を危ふからしめたソプヒストの言説がやがては都市國家的迷妄を破つてヘレニスティック世界主義へミ進むべき根底をなした所に吾々は彼等の時代

の代辯者ミしての貢獻を認めなければならぬ。著者も亦充分に是等を述べて餘す所がない。

著者が「日本人ミしての西洋史學研究」ミ言ふ特殊な條件を脱せんミする抱負の下になされた業績を此處に得てその抱負實現への確實なる歩み寄りを見、著者の喜びを喜びミする次第である。豊富な引用ミ懇切なる註解ミが讀者を便する事の大なるは言ふまでもない。(岩波書店發行、四一〇頁、三・五〇圓)〔猪谷〕